

# JAAF

Japan Association of  
Athletics Federations

公益財団法人日本陸上競技連盟

## 陸上競技研究紀要

ISSN1349-7596



写真提供：フォート・キンモト

目次

### 【資料】

小学生の相対的年齢効果と身体・競技継続意志の関連について

～ “日清食品カップ” 第29回全国小学生陸上競技交流大会

出場者を対象として～

全国中学校駅伝指導者の実態と課題について

－アンケート調査を基にして－

日本代表選手におけるスポーツ・種目転向（トランスファー）の特徴

－日本代表選手に対する軌跡調査－

### 【特集企画】

陸上競技のタレントトランスファー

－ジュニア競技者育成の新たな方向性を求めて－

【日本陸連科学委員会研究報告 第13巻（2014）】

【エキサイティング メディカル レポート】

Bulletin of Studies  
in Athletics of JAAF  
Vol.10, 2014



# 「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

## 投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

### 1. 投稿資格について

特に制限は設けない。

### 2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、資料、指導法および指導記録の報告などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

### 3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

### 4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。（1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成）

英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, sec など）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

### 5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は ——

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ペー

ジの順とする。

例）吉原 礼，武田 理，小山宏之，阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクス的分析。陸上競技研究紀要，2：58-64。

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72。

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a, b, c をつける。

例）田中ら（1996 b）は，——

### 6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する。

〒163-0717

東京都新宿区西新宿 2-7-1

小田急第一生命ビル 17 階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

(Tel 03-5321-6580 Fax 03-5321-6591)

E-mail: kiyou@jaaf.or.jp

### 7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う。ただし，2014年度版は，2015年1月末日とする。

### 8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

(2014年12月 改訂)

## あ い さ つ

公益財団法人日本陸上競技連盟  
専務理事 尾縣 貢

世紀のビッグイベントである2020年東京オリンピックに向けて、本連盟は長期にわたる強化プランを立て実行に移しています。そして、そこに掲げた目標を達成するために、“スポーツ科学の活用”をキーワードの一つにあげています。

この“スポーツ科学の活用”を効果的に推進するためには、関連学会の活動が礎となってきますが、幸いにもわが国にはスポーツ・体育に関する多くの学会が存在します。日本体育学会のように多くの研究分野から構成される総括的なものから専門性の高いものまで数多の学会が活発に活動している国は、世界を見渡しても稀有だと言えます。しかしながら、それらの学会の活動の成果が競技現場で十分に活用されているかという点、そうでもありません。それは、数々の研究から得られた知見が体系化できていないこと、教育や競技現場などへのフィードバック体制が貧弱であること、研究から得られた知見を競技現場が軽視するケースがあることなどの問題点があるからです。これらの問題点を解決していくためには、研究をする側と現場にいる側のお互いの理解を深めていく努力が求められます。

そして、双方をつないでいくためには、競技団体の地道な活動が必要となってきます。本連盟では、科学委員会、医事委員会、普及育成委員会などの尽力により、科学的知見を競技現場で応用する数々の努力を続けてきました。数ある競技団体の中でも最も古くからスポーツ科学を導入し成果をあげてきたという自負がありますが、まだ十分とは言えず、今後さらに競技団体をあげての取り組みを強化していかなければなりません。

本紀要は、本連盟の持つ研究的側面の拠り所であると言えます。本紀要を充実させ、研究の成果を多くのコーチが活用することで、コーチングのレベルを高めていただきたいと願っています。これが競技と研究の融合を推し進め、本連盟の競技力向上につながっていくものと信じます。

# 陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.10 2014

## 目 次

### 【資料】

小学生の相対的年齢効果と身体・競技継続意志の関連について

－ “日清食品カップ” 第 29 回全国小学生陸上競技交流大会出場者を対象として－

・・・・・・・・井筒紫乃ほか・・・ 4

全国中学校駅伝指導者の実態と課題について

－アンケート調査を基にして－

・・・・・・・・渡部誠ほか・・・ 9

日本代表選手におけるスポーツ・種目転向（トランスファー）の特徴

－日本代表選手に対する軌跡調査－

・・・・・・・・渡邊將司ほか・・・ 13

### 【特集企画】

陸上競技のタレントトランスファー

－ジュニア競技者育成の新たな方向性を求めて－

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

【日本陸連科学委員会研究報告 第 13 巻（2014）陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2013】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59

【エキサイティング メディカル レポート】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169